

「標野行」考

連用形中止法の一用法

石坂正蔵

(一)

茜草さす紫野行き標野行、野守は見すや君が袖振る

萬葉集卷一、二〇の額田王の歌は、訓も定まり、集中での秀歌として、その歴史的背景と共に有名である。その第一句から第三句までは第四句をとんで第五句に続くものとして、即ち「標野行き」「君が袖振る」として理解されて来た。第四句は倒置句又は挿入句と見るのであるが、多くは「君が袖振る」「野守は見すや」の倒置と解釈されている。所が近ごろこの伝説的な、普及した解釈に対して、これを否定する研究が学界に提出されるに至つた。沢瀉博士の「野守は見すや君が袖振る」及び「萬葉集講話四」の所説がそれである。後者は二〇、二一の贈答歌について講話風に述べられたものであり、二〇については前者を簡単に易しくしたやうなものであるが、説の進められた点もあつて見逃しがたい。以下略称として前者を「新説」後者を「講話」と仮称する。

「新説」に於て博士はこの歌に関する従来諸説を詳しく紹介整理し、考察すべき点を要約して次の三問を設定された。⁽⁴⁾

(一)「袖振る」とは(1)皇太子の歩く御姿の優れ給ふを形容するにとどまると見るか、(2)作者たる額田王に愛情を示されたものと見るか。

(二)(1)その袖振るは「野守は見すや」と倒置せられたもので、第三句につつくと見るか、(2)句の順序のままに第三

句は第四句につづくと見るか。

(三) (1)額田王か、(2)天智天皇か、(3)警衛供奉の人達か、(4)傍の人か、(5)野の番人か。

この中、(一)は(2)、(三)は、表現に於ける作者の「写象」としては「野守」であり、今ならば「ヒトが見るではございませんか」といふ所であるとする斎藤茂吉氏の説に従つて居られるが、たゞ斎藤説が表現以前の詮索を無用とするのに対し、これは美しく着飾つてその野をあちこちする大宮人、即ち男女のみ狩人たちを場所柄「野守」といつたと見るべきであらう(講話)とする所が異なつてゐる。それは沢鴻説では(二)の問題との關係から、どうしてもそこまで見なければ納まりがつかないのである。

(二)の点に関して博士の説を「新説二講話」にわたつてまとめると、次のやうになる。

(1) 従来無造作に倒絶とか四、五句の倒置とか考へられたものの中には、倒置でないものもあり、倒置としても単に四、五句の倒置と見られないものもある。明らかに四五句の倒置と認められるものも、そのため三句が五句に続く⁽⁶⁾と見るべきものは一例もなく、三句四句の緊密な接続の故にこそ倒置が行はれたのである。従つて此の歌の場合、仮に倒置だとしても「標野行き」は「君が袖振る」には続かず、「野守は見ずや」に直接続くとしなければならぬ。

(2) 而もこれは倒置ではない。といふのはかうした倒置の場合の結句は、助詞「に」で止めるのが一番多く、その他「ば」「は」「を」「つ」「とも」「み」「まで」「ども」や名詞止はあるが、用言止のものは極めて乏しい。それも「欲り」(六例)「ず」(七例)その他で、いづれも「中止形」であり、連体形の例は一もない。普通「君が袖振る」は「ヲ」格として解釈されてゐるが、それは当たらない。しかし助詞「が」があるから「袖振る」が連体形であることは明らかである。従つてこれは「を」の助詞を添へて倒置的に見るべきものではなく、「よ」の助詞を添へて直敘的に見るべきもの、即ち詠歎をこめた連体止と解すべきものである。⁽⁷⁾

(3) 倒置句と見ないで、第四句を挿入句とする解釈もある。佐伯梅友氏の説である。⁽⁸⁾しかしこれも妥当でない。といふのは挿入句の場合は「板ぶきの黒木の屋根は山近し明日とりてもちまぬり来む」(巻四、七七九)の第三句や、「磯の上のつままを見れば根を延べて年深からし神さびにけり」(巻十九、四二五九)の第四句のやうに、その上の句から直接つゞかないのである。所が、この歌の場合、「野守は見ずや」は「標野ゆき」に立派につゞく言葉である。「ゆき」と「見る」との接続は集中に多いが、殊に「ひぐらしの鳴きぬる時はをみなへし咲きたる野べを遊吉追都見倍之」(巻

十七、三九五）や「可、由吉、加久遊岐、見つれども……」（卷十七、三九九）などの例があつて、「紫野ゆき標野ゆき」つゝ「野守」が「見る」といふことは極めてすなほに続くのである。

(4) 第一句から第三句までを第四句にかゝるものとする、一首中「君」に関するものは結句の「君が袖振る」だけになる。「君」に向かつて贈つた歌として物足りない。これは斎藤茂吉氏の沢瀉説に対する批評の一部であるが、沢瀉博士は、「私按の難点の中心を直指」したものと認めて居られる。これに対して「新説」と「講話」ではやゝ異なるつた説明が見られる。「新説」では、面白い解釈より正しい解釈の上に鑑賞が行はねばならぬこと、当時の薬獵が盛大で、女官たちもまじへた美しく賑やかなものであつたと思はれること、「野守」とは行きつれ遊ぶ男女の大宮人たちだとすれば、上三句が第四句にかゝつて第五句へかゝらないことも、むしろ「君」に寄せる作者のひそやかな情熱を表はすかと思はれることが説かれてゐる。この鑑賞上の「難点」に関する辯明は、「講話」に於ては積極的な主張に移つてゐる。それは創作心理にまで立ち入つて、従来の倒置的な解釈は「作者の自然な感情の流を無視した、血の通はぬ分解式国文解釈法」とも言ふべきものときめつけられたのである。即ち第四句までは何を見るときも言はずに、たゞ不安な気持だけを投げ出して句を切り、結句に至つてはじめて「君が袖を振つていらつしやるわ」と叫んでゐる、と見るのである。愛情の袖振る「君」を「目ざとく認めた作者が『こまりましたわ、こんなにたくさん人があちこちしてゐるところで——』と思はず顔を染めた、と同時に『あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は——』と口をついて出たので」あつて、結句は詠歎の意をこめた連体止である。斎藤氏の所謂「甘美な媚態」もかう解釈してはじめて生かされる。

(5) 第三句が第四句につゞくとしても、「標野行」を「シメノユク」とする訓は生硬で流動美を欠き、採ることが出来なく。

(6) この第三句から第四句へつゞく歌を、すなほに解かすに、持つて廻つた解釈をして来たのは、古来のことさらめいた解釈態度にあやまられ、先入見に妨げられた結果に他ならぬ。

かやうにして博士は従来の解釈を一変し、口語訳として次のやうに示された。

(イ) 紫草生ふる禁野をあちこちに行きながら野守たちは見るではございませんか。アレ君は袖をおふりになりますこと。

(ロ) 紫草栽培の禁園を彼方此方行きながら野守は見はしますまいか。あんなに君はお袖をお振りになつて——。
 (イ)は「新説」(ロ)は「講話」の訳である。⁽¹⁵⁾ 第四句の解釈に相違がある。作者の不安を強調することによつて説が進められてゐるのである。

(二)

沢瀉博士は此の説を発表されるまで四十年近く疑問を持ちつゝも旧説に従つて来たと述べて居られる。それは前に述べた「難点」のためである。⁽¹⁶⁾ 博士の実証的研究により従来の倒置説は否定され、挿入説また適當でないことが明らかになつた。しかし一首の声調は著しく害はれるに至つた。流動、屈折、転換、均衡の美は此の解釈では失はれる。何か割り切れない不満が残る。これは斎藤氏のみならず、多くの人の感ずる所であるらしい。従来倒置法として解釈されて来たのは、この歌自身の持つ内容とリズムから自然に感じられるものを、何とか合理化し説明しようとしたのであつて、必ずしも先入見に拘はれた為ではないと思ふ。たゞ倒置説では充分でなかつたことは、「萬葉秀歌」に於ける解釈と鑑賞との食ひ違ひを見ても分る。⁽¹⁷⁾ しかも倒置説の採るべからざることは博士の研究によつて明らかにした。挿入説また然りである。博士は「野守」を大宮人と見、更に「講話」に於ては作者の不安の強調によつて、上三句が第四句に続く重さを説明しようとして試みられたが、上三句に第四句がべた附けに続く所に生々した心理は感ぜられない。又答歌との関係から言つてもさうである。「紫草のほへる妹」と莊嚴し、「人妻」と限定してゐる答歌の表現に對して、贈歌の「君」の何と裸であることか。一首の重みはすつかり「野守」に奪はれてゐる。かくて博士の、いはゞ連続説によつては此の歌の正しい理解は得られないのである。

この歌の四、五句の関係が一応定まつてなほ残る問題点は三句と四句との関係である。第四句で切れるのは明らかであるが、なほ第三句で一つの中止、休止があることが認められる。この休止は三、四句を直接的に、直線的に連接させることによつては充分納得出来ない。私は此の第三句「標野行き」を、萬葉に幾つか例の見える連用形中止法の特異な用法であると思ふ。今、卷一、一五の中大兄皇子の歌を例として考へて見よう。

渡津海の豊旗雲に伊理比さし今夜の月夜清明已會

尤も此の歌は第五句の訓が定まつてゐない。又第三句に本文の異同がある。しかし第五句の諸訓のうちいづれを採用するかは此の場合問題ではない。「清明已會」の「已會」が「コソ」と訓まれ、助詞「こそ」であることは疑ふ余地がないからである。第五句が希求願望であつても強い推量であつても、要するに作者の主観、心情を表はしたものであることに變りはなく。第三句中「さし」は「佐之」「沙之」「彌之」「称之」など不同であり、武田祐吉博士は「イリヒミシ」を採用して居られるが、¹⁸⁾卷十、一八八九の

吾が屋前の毛桃の下に月夜指下心良しうたてこのごろ

の第三句と同じく「サシ」を採用すべきであらう。第一「豊旗雲に入日見し」といふやうな言ひ方があつたかどうか疑問である。かう見定めて考へると、第一句から第三句までは敘景であり、客観である。第四句第五句は抒情であり、主観である。前者は既定確定の事実の客観的表現、後者は未定不定の事実に対する作者の主観的表現である。事象と心情と、この両者を端的に接続するのが「入日さし」の「さし」である。「入日がさしてゐる」と切れるのではなく、「入日がさしてゐるので」「入日がさしてゐるが」と続くのではない。それがそのまま中止的につゞくのである。その轉換的連続に於て、推量又は願望が發せられてゐる。さう見なければこの歌は分らない。斎藤氏は「第三句の『入日さし』と中止法にしたところに、小休止があり、不即不離に第四句に続いてゐるところに歌柄の大きさを感ぜしめる¹⁹⁾」と言つて居られる。

この中止的轉換的に推量、願望、疑問、命令等をつゞけてゆく中止法の用法について注意したのは案外少ない。佐伯梅友氏が「萬葉語研究」にやゝ注意して居られる²⁰⁾から参考されたい。

河上のゆつ磐群に草武左受常にもがもな常処女にて (卷一、二二三)

磐代の濱松が枝を引結真幸くあらばまた還り見む (卷二、一四一)

「引結」は「引き結んだのであるが」「引き結ぶのであるが」のいづれにしても、確定した事実としての表現である。この「引結」が「ヒキムスビ」と訓まれるとすれば

妹が門行きすぎかねて草結風吹き解くなまたかへりみむ (卷十二、三〇五六)

の第三句も「クサムスビ」と訓むべきであらう。

み雪零る越の大山行過、而いづれの日にかわが里を見む (卷十二、三一五三)

「越の大山を行きすぎてしまつた今へとなつては」の意として、旅のあはれさも現実感として身にしてみるのである。佐伯氏が「玉もりに珠は授けて」（巻四、六五二）について「ここまでは今までの事実を述べたもの、いはば『珠は授けつ』といふやうな心持を、軽く次につゞく形でいふために、『授けて』としたもので、ここに一寸休止をおいて考へるべきではないか」と言はれたのは正しい。

越の海の信濃の濱を由、伎、久良、之ながき春日も忘れて思へや（巻十七、四〇二〇）
君が家の池の白浪伊、蘇、爾、与、世、しばしば見とも飽かむ君かも（巻二十、四五〇三）
かうした句法は一方に於て序詞に近づき、效果に於て

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづへの方に我が恋ひやまむ（巻二、八八）
と同じものになる。

春日山朝立つ雲の不、居、日、無、見、ま、く、の、ほ、し、き、君、に、も、あ、る、か、も（巻四、五八四）
若月の清にも見えす雲、隠、見、ま、く、ぞ、欲、し、き、う、た、て、こ、の、ご、ろ（巻十一、二四六四）
となると、上句が技巧的な序になつてゐると共に、下句に於て未定へ向かふ情意が現在に措定され概念化されてゐる為、やゝ質のちがつたものになつてゐる。しかし、

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独し思へば（巻十九、四二九二）
の如きさへ、第三句で充分な休止を考へなければならぬ。

かやうな中止法の用法は記紀の歌謡に既に見ることが出来るが、萬葉集に相当の例があること以上の通りである。殊に中大兄皇子、吹黄刀自、有間皇子とほゞ同時代の作歌の第三句に此の用法があることは、額田王の歌を解釈する上に考慮しなければならぬ。第一句から第三句までは客観の景である、若しくは行動である。第四句は疑問、不安、警告である。それを中止的につなぐのが「標野行き」の「行き」である。第五句は再び客観にかへり詠歎をこめて終止する。A—B—A'—B'と図式化してもよからう。別の見方からすれば、はじめに大きく場所と動きを示して、一転し、再転して焦点を握つてゐる。挿入句のやうに軽くない。「野守は見すや」は相當に重いひびきを持つてゐる。

(三)

所で上三句には主語がない。普通は「君」と考へたい所であるが、多くの例から「われ」とも考へられる。額田王自身の行動と見るのである。或ひは額田王自身及び他の人々を含んだ「われ」「われ」の複数「われら」の意味と見てもよい。棠しげで動きがあつて面白い。

美しい紫草の御料園を、かうしてあちこち歩いてゐる、と、まあ野守が見るではありませんか、あんなに袖を振つてゐらつしやる。

従来、の解釈は作者額田王の位置を一点に固定させてゐるやうに思はれるが、如何であらう。しかし私はまだ此の解釈に自信がない。唯一のものと思ふまでに至つてゐないので「君」の省略と見て置く。第五句に「君が袖振る」と「君」が表現されるアンテイシペイションから、上三句には主語は表現されなかつたと見て置く。

美しい紫草の御料園を、行つたり来たりなさつて——、まあ野守が見るではありませんか、あんなにお袖をお振りになつて。

かやうに私の解釈も究極的には決定してゐないが、第三句が特殊な中止法であるといふ考へは決定的である。歌の口誦性、時間性との關係にあつてこれは決して不自然でないばかりか、まことに端的な接続であると思ふ。第二句第三句の繰返しの効果も、その中にあつて生きて来るのである。なほ「野守」や「君」や答歌の初句についても考察すべきであるが、今は省略する。

この歌の第三句、第四、第五句に関する考へ方は前から持つてゐたのであるが、沢瀉博士の研究によつて諸説が整理され、倒置説の不当が明白になり、更に新説を提唱されたことを基礎とし、契機としてはじめて発表し得るに至つたのである。学恩を謝する次第である。

(二七、七、二二稿)

【註】

(1) 第三句を「シメノユク」とする山脇万古氏「万葉集正訓」の説がある。(沢瀉氏論文による。)

- (2) 美夫君志会編「万葉集新説」所收。
- (3) 万葉学会編「万葉」第四号所載。
- (4) 新説一二五、一二六頁。
- (5) 講話六七頁。
- (6) 新説一三〇—一三五頁。
- (7) 同 一三一、一三七、一三八頁。
- (8) 「万葉語研究」所收「卷一の語法」二三七、二三八頁。
- (9) 新説一三五、一三六頁。
- (10) 同 一四〇頁。
- (11) 同 一四〇—一四三頁。
- (12) 講話六七、六八頁。
- (13) 新説一三九、一四〇頁。
- (14) 同 一三六、一三七頁。
- (15) 新説一三九頁、講話六八頁。
- (16) 新説一一六、一四〇頁。
- (17) 「万葉秀歌」上卷一九、三〇頁。
- (18) 「万葉集全註釈」第一卷一〇三頁。
- (19) 「万葉秀歌」上卷二二頁。
- (20) 「万葉語研究」所收「卷一の語法」二三四、二三五頁。「玉もりに珠は授けて」二九九、三〇〇頁。
「一種の中止法」三一六、三一七頁。
- (21) 同 二九九頁。